

■うんちく酒話

●**お酒を飲むと肥るのか** 肥ります。という説と、お酒だけでは肥りません。という説があります。

前者は、アルコールは他のエネルギー源より肝臓に吸収されやすいので、脂肪組織に蓄えられて、肥満の原因になるというものです。後者は、肥満はアルコール自体によるものではなくて、まったく飲まない肥満の人と同じで、食物からのエネルギーを過剰にとるもの。つまり、おつまみの食べすぎというわけです。飲んだあとの、ラーメンが肥満の原因かもしれません。

●**どのくらいお酒を飲んでるか** 世の中酒飲みは多いものですが、世界に目を向けると日本人なんか可愛いものです。アルコール飲料年間消費量というデータ（2003年）を見ますと①ルクセンブルグ12.6ℓ、②ハンガリー11.4ℓ、③チェコ11.0ℓ、④アイルランド10.8ℓ、⑤ドイツ10.2ℓ、⑥スペイン10.0ℓ、⑦イギリス9.6ℓ、⑧ポルトガル9.6ℓ、⑨デンマーク9.5ℓ、⑩オーストリア9.3ℓ、と、ベストテンはヨーロッパ各国が独占します。日本は29番目で6.5ℓです。

●**大手メーカーより地酒の方がうまいか** うまい地酒もあるというのが、正しい認識でしょう。地酒はうまい



お酒の雑学…IV

お酒とカクテルのカロリー分

酒	分量	Kcal	酒	分量	Kcal
生ビール	中	200	カルーアミルク	一杯	250
清酒	1合	200	アレキサンダー	一杯	200
紹興酒	1合	200	カシスオレンジ	一杯	176
サワー	一杯	140	ダイキリ	一杯	135
ウーロンハイ	一杯	90	マルガリータ	一杯	125
グラスワイン	120ml	100	マンハッタン	一杯	120
ウイスキー	30ml	75	ドライマティニー	一杯	115
ブランデー	30ml	75	ジンライム	一杯	110
バーボン	30ml	65	白米ご飯	一杯	120

という一方的な言い分は、誤解か迷信です。当然、不味い地酒もあります。大手の酒は決して不味くありませんし、品質のレベルは高いと思います。

いま、酒作りは大きな岐路に立たされています。高齢化

と後継者不足による杜氏不足が深刻だからです。そこで、今業界で進められているのは優れた杜氏の経験と勘をコンピュータソフト化することです。そして、近代的な設備と技術によって酒造りを行っている地方の蔵が多くなってきています。杜氏なしの蔵すらあります。製造の技術は大手も地方も差がなくなりつつあります。ただ、地方の蔵には、その蔵だけの長年の知恵と経験と材料と水といった独自のものがあります。これがうまい地酒です。自分の口に合った、うまい地酒を探してください。

■ビールの歴史

日本の生産量は世界で第7位、年間653万ℓというビールの、要点だけ駆け足の歴史の話です。

初めてビールが入ってきたのは明治2年です。アメリカ人のウイリアム・コーブランドが横浜に醸造所「スプリング・バレー・ブルワリー」を設立。居留外国人に販売して評判になり、日本人にも地名から「天沼のビアザケ」と親しまれたといいます。

明治5年に大阪で渋谷正三郎が「渋谷ビール」を製造したのを皮切りに、甲府に「三鱗ビール」、札幌に「北海道開拓使麦酒醸造所」ができました。その後100社ほどに増えますが、34年に課税されたことで20社に

減り、千石（180ℓ）以下は免許取り消しと淘汰されていきます。その後の歴史は複雑です。

「スプリング・バレー・ブルワリー」の出資者になっていた岩崎弥之助、渋沢栄一などが、明治21年にドイツ風ラガービールの麒麟ビールを発売。40年に「麒麟麦酒」を設立。以来全国発売を続けてシェア60%という大メーカーに発展します。

明治26年東京に「日本麦酒」、北海道に「札幌麦酒」、大阪に「大阪麦酒」ができます。その後、曲折があつて政府の勧告で3社が合併して「大日本麦酒」が設立され、麒麟と対抗します。戦後、財閥解体によりサッポロビールとアサヒビールに分割されて現在にいたるというわけです。エビスビールは昭和46年の復活です。このころからサントリーとの競争で「生」の争いが過熱します。

そして「ドライ」で、アサヒが麒麟を抜きます。いつまでつづくかビール戦国時代です。

サントリーは、寿屋から昭和5年に発売した「オラガビール」からですが、38年に社名をサントリーに変更したことで「サントリービール」になります。日本で最初の瓶生の発売。本格生ビールのモルツと定番ブランドになっています。プロの間では評判は高いようです。